

## 実践的 革命論

# コミュニズム ナロードニキ革命

## 〔前〕人民とは何か？

### 人民の内と外

ナロードニキ「人民の中へ」とは、何とも奇妙な言い草です。「では、オマエたちは今まで何処にいたのだ？」そうです。「中に」と言うからには、外にいたわけでも。しかし、日本というピラミット体制を、ドロップアウトした以上、私たちは人民の上にいたわけではありません。勿論、人民に「下」はありません。あるいは又、人民世界は「中心が多元に遍在し、その円周が無限のヨコ世界」ですから、前後左右にいたわけでもありません。「では、斜め横あたりに……」と言う前に、そも人民とは何でしょうか？

この得体知れぬ巨大な有機物、キラ星の如き偉人、聖者たちから祝福され、激励されて来たにも関わらず、未だに解放されることなく、生成変化のたうち回り、いつの時代にも搾取され、弾圧され、差別されて来た無名の天群、この巨大な犠牲の上に、権力のピラミットは堂々として、今日に至っているのです。

### 苦痛の吹きだまり

人は、自らの苦痛を通してしか、目覚めません。これはギビシイ真理です。従って、時代の苦痛、即ちピラミッドの重圧を、一番底辺で支えている人民こそが、世界の歪みに目覚め「畜生！重たい。何とかならんか！」という、革命主体に成り得るのです。

自然が、生態系ネットワークから分断され、人工的メカニズムに組み込まれることによって「不自然」に変質するように、人民も階級（カースト）体制に組み込まれると、昨日の友をアウトカーストとして分断、差別することによって「非人民」になります。「あくなき背信と差別による自己保全」これが、競争社会に組み込まれた近代市民モラルの本質です。

このフチブルモラルに複合汚染された階級、または地域からは、革命の火の手は上がりません。「近代」が人民世界を襲い、疎外の危機が生活から自我意識にまで及んだ時代に、最も激しい苦痛と不安を味った人民たち、即ちロシア革命では主役を演じた労働者たちも、今日では組織労働者、サラリーマン階級という「中間搾取層」に組み込まれた上に、マイホーム、マイカーの洗脳によって、骨抜きにされてしまいました。例外は多少ありましようが、彼らは「国会議事堂を爆破して、皇居に火を放つ」などという空想を、決して樂しまないでしょう。勿論、反乱、暴動など決して望めない証拠に、賃上げしかやる気のない彼らのストを御覧なさい。

国民の90%は「自分は中産階級である」などという錯覚を与えている権力者の魔力「物質文明」は大したものですよ。なにしろ議会制民主主義などという「群盲ミーハー政策」

を条理として固定化してしまったのですから。テレビのある生活から、ピアノのある生活へ、一億総ミラー路線です。そのため、ろくすっぽ票にならないアウトカーストは、革新政党からさへ小教員以下切り捨て、にされることになりました。かくて厂史は、プロレタリア革命当時“前近代的存在”であった、百姓、漁師、土方、日雇い、浮浪者、心身障害者、部落民、少数民族などの社会に、新しい“苦痛の吹きだまり”を作ったのです。

## 人民の目覚め

重層的差別構造社会の中の、どこから革命の火の手は上がるか？ 勿論、最底辺階級と階級からはみ出したアウトカーストからです。ところで支配は、底辺の分断の上にのみ成立します。従って最底辺人民たちは未だかつて、一度も団結に成巧したことが無いのです。なぜなら、団結するためには「自分は人民である」という、主体的自覚が必要だからです。

人民の自覚は“被差別の苦痛”によってもたらされます。ところが長年、分断され、個的に苦痛を耐えしのび、忍ぶために鈍くなり、無気力、無自覚になり、奴隷根性になっている状態では、団結は不可能です。

本来自由、平等である自我に目覚めること「痛いじゃないか、この野郎、オレだって人間だぞッ！」と、誰かが叫んだ時、耐えぬいて少々あかしくなっていた連中が、ハッと我にかえり「そうだッ！」というこだまを返えし、そのこだまが巨大な雪崩を誘発することによって、人民戦線は形成されるのです。ほんの一握りのブルジョアと、90%のプチブル？の重圧に耐え抜いている最底辺人民たちが、いつまでも黙っているはずがありません。抑圧が加わり、圧縮、加熱される程に爆発は不可避となり、その臨界爆発は連鎖反応によって限界性をぶち破るが故に、真に人民たらしとする者は“非国民。たらしざるを得なくなります。国家から表彰されて喜んでいる連中は、非人民、裏切り者と識別すべきです。

ところで、労働者による階級斗争が、中間層の増大に伴う議会制民主主義によって、革命にまでは決して至らない現在、爆発はもつと別の形態を採るしかありません。

## 公害

ピラミッドの重圧は、それ自体の歪みによって、地域的にも、個人的にも格差があります。ある地域は他の地域よりいっそう搾取、差別されており、ある精神はミラーたちの想像を絶する苦悩を味わわねばなりません。この不条理が、新しい革命を用意しました。即ち“公害”という近代産業がもたらす新種の苦痛が、起爆剤となって、反権力斗争は都市住民レベルでの階級斗争に代って、被差別住民による地域斗争が、主役を演ずることになったのです。“戦後民主主義”が、未だに普及していない“前近代的辺境”にこそ、逆転のエネルギーは潜んでいるのです。公害ばらまきの“日本列島改造論”こそが、その触媒となりました。

「公害問題さへ無ければ……」厂史の趨勢に流されて、眠るが如く大自然の風景に没し

たであろう辺境地域、あるいは平凡なたぐいの市民で終わったであろう人々に、突然“人民の目覚め”が起こったのです。このコンピューター管理からの“辺境部分、こそが”分権独立革命、の発火点です。

ところで、地域からの搾取によって成立している地域なき地域“都市。この公害汚染の吹きだまりには、意外なことに革命の火の手は上らないのです。きつと権力の根城からの毒物放出によって、苦痛が麻痺しているのでしょう。今のところ後衛基地での反乱は、ずうっと差別され、眠り込まされて来た性、女性の目覚めと決起を待つしか無いようです。

抽象という罠に捕われている男性より、具体的、直接的な本性を備えている女性の方がより鋭く危機を予知して「子供たちの食物は、自分らが吟味、選択せねばならない」という自覚から、更に「自分らが生産確保するしかない」という実践にまで、踏み切る可能性があるので。彼等らこそは“都会内辺境、であるスラム街や、被差別部落の人民と共に、来るべき食糧パニック時には「わが都市を芋畑に！」という反乱を起こす主戦力となるでしょう。「君たちは幸運だ、敵の心臓部にいるのだから」という、チエ、ゲバラのメッセージを、都市ゲリラ達は忘れてなりません。

## (示) 地域社会

### 地域自我

中央集権と地域社会との関係は、主人と奴隷の“直列振子型、であり、奴隷たちと同様に、部落と部落、村と村、島と島は分断され、管理されて来ました。奴隷が団結すれば反乱であり、地域が団結すれば一撓です。公害問題がもたらした肉体的、精神的苦痛を共有し合うことによって、反公害斗争は各地に強力な反権力集団を形成しました。それは未だに合法活動と票読みに明け暮れる旧左翼路線を“時代遅れのアナクロ、にしてしまう程の、新しい革命戦線に急進化しつゝあります。その新らしさは、例えば地域住民斗争が決して“指導する中央、を持たず、斗争路線そのものが“出たとこ勝負、の戦いを通して、自動的に人民の中から撃ち出されて行くという、徹底したゲリラ性にあります。この主体的多様性は、権力にとってこの上もない脅威です。

ところで、分断孤立させられて来た地域社会を、連動させるに必要な“地域自我、の確立は、マスソサエティの概念と理論に毒されてしまった都市住民には不可能です。なぜなら、マスソサエティとは規格均質化であり、個性と多様性の抹殺であり、土着性の死ですから。

「我々は現在のみならず、過去に於ても差別されて来たのだ」という共有感情、愛着と怨念のこもった地域自我は、現今では辺境地域にしか残っていません。それは目覚めの一時、逆差別やナショナリズムのような“大型ナルシシズム、の形態を採ることがあっても、いざ起ち上って人民戦線を見渡せば、「自己の特殊性は、多様性という人民戦線の力である」ことを悟って、自己中心性を脱皮するでしょう。

規格画一化を免れているが故に、管理支配体制の半端者であるアウトカーストたち、半端地域である被差別社会は、各々、特殊異常なことに於て平等なのです。目覚めの程度の差は、時間の差であつて、質的な差ではありません。三里塚が革命の最高学府と言われるのは、あそこの人民が、ちよいとばかり先に目が覚めたからです。

## 辺境地域社会

若者収奪と放ったらかし政策、過疎高齢化に加えられた日本列島改造公害大資本の侵略によって、辺境地域は今や、伝統的な村落共同体を崩壊され、滅亡の危機に瀕しています。

まるで血を抜かれ、ろくな手当ても受けず、飢え苦しんでいる者に、毒ダンゴを盛るような非道い仕打ちですが、これこそ権力による人口調整だと知るべきです。

世界の構成基盤であり、食糧生産地であり、文化の創造母胎である「民族の故郷」が、現代の歪みと、苦痛の吹きだまりになっているのです。この母胎の苦しみこそは、新しい革命の陣痛の苦しみ以外の何ものでもありません。

資本と公害の侵略は、長年閉ざされて来た小宇宙に風穴を明け、攪拌、解体し、近親憎悪と種内攻撃が堰を切り「賛成派、反対派」の図式通り、常に正反ふたつのベクトルが葛藤する坩堝と化しました。一方は権力ピラミットの中に組み込まれようとする上昇志向、他方は底辺の中により確かな人民の団結を求めようとする拡大志向です。どちらも力の追求ですが、一方は虚妄へ、他方は実在へと趣きます。そのことは、一定の辺境社会の中へ、ヨソ者、例えば「ヒッピー」のような、新種のアウトカーストを投入することによって、明確に反応、証明されます。即ち、上昇志向者はこの新参者を拒絶、差別することによって、お上に対して「ハイ、ハイ、とちようだい、のお手上げをするのに対して、拡大志向者は「理解よりも信愛」という人民の倫理によって、新参者を戦線に招くのです。

輸血の産物にも似たこの混沌と解体を通して、被差別地域に革命の火は、着々と準備されて行くのです。それらを包囲する野性的自然からの、強烈なヴァイブレーションに鼓舞されながら。

## 食糧危機

勝負の決め手は食い物です。「死膳(自然)は食えない」という、石油企業誘致促進派の立看板がありました。自然しか食ったことの無い連中の言い草です。

さて、天然異変による世界的食糧危機がやって来たらどうなるでしょう？ 先ずはパニック、暴動、米騒動のあと、都市生活者たちは我先にと、金とコネを頼りに村落社会へと押しかけて行くでしょう。ところが現在、日本のほとんどの農村、漁村には、自給する食糧すら無いのです。茅一次産業では、食えないようにしてあるのです。

ところで、こうした状況の中で、もし食糧の自給自足が出来ている地域社会があつたらどうするのでしょうか？ 都市生活者に「焼け石に水、程度の食糧を供出して、自らも飢死



するでしょうか？ 長年差別されて来た国内植民地、辺境、僻地、離島のあちこちで、積もる怨みを晴らすべく、日本株式会社を“地域丸ごとドロップアウト。して、分権独立を宣言し、自らの食いぶちを自治管理しようとする運動が起ったらどうなるでしょう。子や孫のことを思えば、武力抗争も辞さないでしょう。

革命にはこのような“天の利、地の利、が必要なことを十分に計算に入れて、“人の和、即ち、生産共同体作りから販売ルートまでの、食糧の地域自治を実践して行かねばなりません。あと十年、二十年、必ずチャンス、即ち食糧危機は来ます。その時までには、私たちが今、何を為すべきかをもっと真剣に考え、行動しなければなりません。勿論、権力による人口調整作戦の一つである“公害食品、からの、日常茶飯の自衛も怠ってはなりません。

## 破局

人民による革命、それは全人類が生き残れるかどうかの賭けです。権力とは“死の絶対、へ向かうベクトルです。「権力者自身が死んでしまうような、そんな馬鹿な戦争をやるはずがない」と言うのが、お目出たい常識です。だが世の中には「自分の死が避けられないのなら、全てを道づれにしたい」と思っている奴が沢山いるのです。否、あらゆる人間の内部には、この生々しい現実世界を逃がれて、絶対の秩序、即ち“死の水平、を夢見る欲望が多少はあるのです。

権力欲とは、有限な自己を絶対化して、全てを支配し、世界を虚構の中へ封印し、時を止めてしまいたいという死の願望、ネクロフェリヤによって支えられたエゴの極限です。

それは生成変化し、混沌する人民世界のネガティブであり、欲望の影、魂の極北です。いつの時代にも権力者の支配欲は“地上の全て、であって“より多くの生命、ではありません。異端者、異民族などの“管理不可能、な部分は、それなりの理由をつけて、殺害、絶滅させた方が、支配は容易、かつ完璧な秩序が組立てられます。ナルシズムが民族を煽動し、国家主義が“肉体と生命の軽視、を蔓延させ、権力は自らを“純粋にして高貴なるもの、という自己催眠にかけ、アウトカーストを“雑種にして賤しきもの、にデッチ上げ、その絶滅を企むのです。

石油と放射性物質という地下埋蔵エネルギーの解放による環境汚染は、戦争に勝るとも劣らないほど、アウトカーストの大量殺戮を容易にしました。巨大CTS、原発、核燃料再処理工場などが、コンピューター管理の行き届かない辺境地域に狙われるのはこのためです。平和産業の名の下に行使されるこの“明かるい暴力、は、文明の内奥に潜む野性の暗闇、理知の照明の届かない意識の奥底に対する、ゾーンとする恐怖によって拍車をかけられ、冥界の魔王アルトニウムの完全支配を渴望するのです。

日の丸、君が代、天皇などの“死の象徴、によって演出されている“日本帝国劇、も又、アルトニウムによる世界征覇を企んでいることは確かです。鎖国という長い純粋培養によって狂った民族の“死と絶対、への渴望です。

ところで、食糧危機は革命戦線にとって、チャンスであるように、権力者共にもチャンスなのです。食糧危機を口実に、日帝権力は再び、アジア武力侵略を企むでしょう。しかしアジア人民は、この30年で鍛え上げられ、強くなっています。原子力武器を使わない限り、とても勝目はありません。そうすると国内植民地の分権独立は、国外植民地を破滅に追いやることになりかねません。まして権力側は、危機を演出することだって出来るのです。「世界同時革命」そこまで地域住民斗争の意識を高め、過激先鋭化しなければ、真の勝利はありません。

## (悟) コミュニオン

### 近代的自我

私たちは「苦痛の吹きだまり、の中に潜在している神聖なエネルギーの存在を信じながらも、人民の「無名性」の中へ飛込むためには、屈折した孤りぼつちの旅を経ねばなりませんでした。それは私たちが「近代」によって、「自然界の無名性」から分断され、「個人主義」の独房に、自我を閉じ込められて来たからです。

資本主義市民モラルの欺瞞の温床で形成、発展して来た私たちのいわゆる「近代的自我」とは、状況に支配され、疎外され、分断されて来た「世界観」、「人生観」であり、「自分は月並みの人間ではない」というコンプレックスによって「有名性」を競い合い、他人の眼によって自己を評価するという、本来の姿を見失ってしまった自我のことです。

近代文明、近代産業、近代社会、近代合理主義、この「近代」という死に至る流行病を克服しない限り、創造的未來はありません。従って私たちが、自らの内なる近代、即ち、「個人主義」を超越し、新しい人間関係、新しい「集団主義」を、実験的に創造して行かない限り、革命はありえないわけです。

私たちが真の革命主体となるためには、何よりも先ず、私たち自身の解体と変革が必要であり、それなくしては未來のヴィジョンなどありません。新しいタイプの人間による、新しいライフスタイルの探求、新しい革命とはそれ以外にはありません。なまじつかな修正主義や、改良主義は、革命を遅らせ、ファシズム支配を容易にするだけです。「あなたの自我が「白人的なもの」に支配されている限り、人類に未來はない」のです。

### 脱体制的自我

私たちは日本というピラミッド体制を、自主的に脱け出た者です。ドロツプアウトというのは、単に学校や職場を捨て、故郷や家庭を脱出するといった現象面の事だけでなく、地縁血縁や、義理人情の支配からも自己を解放するという、心理的な「関係性の清算」でもあります。一度「個」に徹してみることによって、真実の人間関係を求めるのです。

この時、体制のまやかしと差別の何であるかを、身をもって知らされます。そこで私たちは、日本の法に対する無法者、アウトローであり、国家空間内に在りながら異邦人であり、近代文明の中にあつて野蛮人であることを意欲するのです。原始仏教が「出家者はカーストから解放される」ように、私たちも「出世を断念し、一切の差別を認めない」ことによつて、天皇制国家の社会的モラル、文化的伝統、ライフスタイルから美学に至るまで原則的に自由な人間です。

こうした「歴史の産物でしかない自我」に対する謀反、反逆の結果、私たちは「明日は明日の風が吹く」式の根無し草、渡世人となり、「ヒッピー」などという可笑しなレッテルを頂きましたが、要するに最底辺の人々の巷を彷徨う、サイコロも腕力もテリトリーも持たぬ一匹狼として、大義に生き、愛に賭けた正統派アウトロー、新しいアンタツケヤブルに成ったのです。

ところで私たちは、個に徹し、個の重みに耐えかねた連中が、再びアカデミックな権威主義や傍観主義に陥り、新しい関係性を開拓しえないまゝ、個人主義、マイホーム主義の陥穽に埋没してしまつた事実を沢山見えています。「個の重み、それは脱出した者に対する体制内市民の、嫉妬と羨望に満ちた悪意でもあります。

## 徒党を組む

アナーキーな個である限り、社会は必ずその存在を潰しにかかり、「立身出世」の罠に捕え、無毒形態化してしまうでしょう。個性が力を発揮するのは、既成社会に対決する新しい集団を形成して、その中の「関係的個」として、機能する時だけです。新しい集団の形成は、ドロップアウトと同時進行的に準備され、試行され、類は類を呼び、理想を採求し、反体制の砦を形成して行きます。

私たちは60年代後半から、新しいコミュニケーション運動を開始した。世に言う「ヒッピー共同体派、部族」を源流とし、「スワノセ島を護れ! ヤマハボイコット」運動を経て、'75年夏から奄美、枝手久斗争の真只中へ、コミュニケーション運動を持込んだ者です。

普通、集団主義はその構成分子を画一化し、権威によつて秩序づけられています。そのためどうしてもセクト化し、異質なものを排除し、主観主義やエリート意識に陥つて、前衛の自惚れに浸り、内ゲバが絶えないということに成ります。指導者、指導原理、組織、という三種の神器によつて、成員を個性なきロボットにしてしまうのです。それは強力なロボットには違いありませんが、権威主義から解放されていない人間は「自由軍」の真の戦士とは言えません。新左翼ですら、未だにこの石翼並みの感覚で戦っているのですから困つたものです。このマクザ的親分子分、学生的先輩後輩、サラリーマン的上役下役などの関係性を、一刀両断にしない限り、自己変革はありません。

私たちは、各人の個性を抹殺することなく、逆に形にはまらない<sup>な</sup>生きた人間の個性の多様さが力になるような、開かれた集団主義を目指しています。各人の弱點や欠点を、いわば

「背中合わせにして陣を組む、厳しい現実に対応しているのです。それは弱者を差別する実力主義や、機能主義を批判し、各人が自らの未知なる可能性を探索出来る、機会均等を、心掛けて行くことです。百姓も漁師も、ズブの素人であり、本来なまくら者の私たち脱都会人間が、何とか食って行けるどころか、今や斗争主体に「成り上りつゝある。のは、コミュンなればこそその経済的、時間的余裕をフルに生かしているからです。

## 道場としてのコミュン

既成社会の中に、全く異相の小集団社会を作るということは「アカの他人でも、信頼と尊敬と平等の精神によって、このように豊かで、楽しい共同生活が出来るとだ」という、来るべき革命社会の雛型を示すことであり、生活そのものを革命の手段と目的にして行くことです。

最大の問題は「所有」というやつです。所有観念、所有欲に対する決定的な変革が必要です。私有財産制度と国家主義が悪の根源であり、「私と、私のもの、が根源的無知であり、破滅寸前の人類史の病根です。

「賤布を一つにすること」これが、革命的コミュンの根本原則です。「共に食ひ、共に飢える、の信愛と団結なくして、共同生活は不可能です。核家族、マイホーム主義こそは、権力側の分断作戦の最高のヒットです。

分断と差別からの解放、それがコミュン主義の理想である以上、分断差別されて来た女性の解放こそ、コミュン運動最大の課題です。女性が依然として家事、育事のみに専念している限り、そのコミュンはまだ革命以前というわけです。男中心社会の中で、長年培われて来た男性の、内省化し、体質化してしまつた無意識の権威主義、機能主義、プライドが総括されねばなりません。男と女の「関係性の変革、一番身近かで、一番大切な革命はこれです。

共同生活の最高課題は、人間関係の面倒臭さにあります。我の強い、個性的な若者たちが、鼻つき合わせて生活して行くのですから、否応なく葛藤が生じます。権威主義者や自分の殻を破られたくないナルシストは、出て行くしかありません。このエゴとの戦い、自己批判と相互批判を通じての個の解体と変革ゆえに、私たちはコミュンのことを道場（サンスクリット語でアシュラマ）と呼ぶのです。

それは又、便利さの追及の結果、此処まで精神と肉体を墮落させてしまつた物質消費文明に対して、今一度、頭だけでなく感覚器官、行動器官の全てを革命、解放して、本来のデリカシーを復活させ、可能な限り物に依存しない手造りの生活、体制側のコマーシャルに乗せられない大地に根を張った生き方を探索して行くことです。

この絶望的な状況、「21世紀は果して存在するのか？ 迫り来るアルトニウム支配を拒否出来るのか？」を、誰一人として予言出来ない時代に、「とは言え戦うしか道はない」のであり「自分の事などにこだわっている暇はない」ことを、アシュラマは悟らすのです。



# (入) ナロードニキ

## ドロップイン

個的斗争から個的連帯へ、更に同病相哀れみの徒党を組んでも、それが特殊、特定の仲間限定された共同体集団である以上、なれ合いとユートピア主義に陥り、地域社会との一線を画した反革命的なものになってしまうでしょう。

私たちは、地域住民斗争の真只中、血縁共同体崩壊の混沌の中へ、コミュニケーションとしてナロードニキしました。1860年代、ロシア革命前夜に、貴族のインテリたちによって試みられたナロードニキ運動の不発は、明らかに農奴という前近代的存在に対する認識の欠如、買いかぶり、観念的美化にあったに違いありません。

革命のためには団結が必要であり、団結のためには人民意識が必要であり、そのためには「被差別の苦痛」に対する自覚と、怒りが必要であり、それは「近代」によってもたらされるのですから、ナロードニキは前近代が近代によって侵略され、葛藤がドラマチックに燃え上っている「現場」に為されなければ「革命的状況」を、生み出す事は出来ません。

革命的状況とは、既成の価値観から倫理観に至る一切が、批判され、人民が主体的に新しい社会を選ぼうと意欲し、「近くの親戚より、何処の馬の骨とも知れぬアカの他人」により大きな信愛を感じる状況です。

革命に火をつけることは、人民を指導し、啓蒙し、煽動し、組織しようとする事ではありません。この戦法はもう時代遅れです。ナロードニキ革命の戦法は、「現場」の混沌に拍車をかけ、解体を促し、「親子、兄弟の間へ剣を投げ込みによつて来た」キリストのような存在になって、自らも地域社会との相互作用によって、解体、変革し、人民になり切つて、助っ人から斗争主体へと変身、成長して行くことによって、地域斗争を「世界同時革命」にまで急進化して行くことです。

公害問題こそは、長年閉ざされて来た中世的<sup>へきれき</sup>辺境地域に、晴天の霹靂のような「近代」の乱入です。住民の多くは、近代的自我を経ずして、いきなり「被差別の苦痛」を自覚し、人民意識を確立するのである。例え文盲であれ、この近代の衝撃による心の拠り所「血縁共同体崩壊」という苦痛は、彼の眼を外に向けさせずにはおかぬからです。その時、奴隷化されて来た祖霊たちの無念の涙が、彼の頬を伝い、血と火の復讐へと駆けり立てるのである。

## 郷に入りて 郷に逆らう

反公害住民斗争には、必ずや何人かの献身的リーダーがいます。彼らは都会を知り、公害の恐ろしさを学び、権力への怒りに燃え、自己疎外を体験し、「近代悪」に対する免疫を得た後、自らの拠つて立つ地域に戦線を敷いたのです。

彼らは地域のしきたりや掟、迷信やボス体制に對する、合理的な反逆者であり、熱々に

る正義漢であり、村落社会の復活のためには、旧態然たる血縁共同体社会を積極的に解体、変革することを意欲しています。このような情熱的な義人、の存在なくして、ナロードニキ革命は不可能です。彼らを「橋渡し」として、良き協力者として、ナロードニキは自らの理念を貫くのです。でなければ、ナロードニキは地域の潜在勢力に屈服、妥協して没してしまうでしょう。そしてそれは「権力の用心棒」という保守反動に転落しかねません。なぜなら、日本の村落社会とは、天皇制の悪の温床なのですから。

ナロードニキが個人でなく、コミュニケーションであることの強さは、この点でも十分発揮されます。個人であれば、単なる変屈者として村八分にされ、令断孤立されかねない状況にあっても、集団としての力を備えている場合は無視出来ないのです。ヨソ者として、行動以前に存在そのものが、十分にスキャンダルなのですから、さ、い、な事は郷に従うべきですが、一臾だけは断固として主体的であるべきです。即ち、「自分たちは「天皇と天皇制」に対する敵対者である」ことを、常に公然としておくことです。

ナロードニキの至上命令は「人民のハートを撃て！ 信頼を獲得せよ！」です。長年騙され、痛めつけられ、馬鹿にされて来た人民は「ケチ臭さとひねくれ、を内省化していますから、ほんのちよつとでも権威めいたものをちらつかせれば、すぐ仮面をつけてしまいます。例え理論によってであれ、武装したものを、野性的本能は警戒するでしょう。信頼は隙だらけの裸人間だけが得られる特典なのです。

「百戦錬磨の純情可憐、武器はこれひとつ。折伏やお説教ではなく、日々の生活と斗争を通して、「天皇制が我々の苦痛の原因である」ことを共感し合い、焦らず、根気に、床の間に飾ってある天皇一族の写真を、その家の主が自主的に取りはずすまで、働きかけねばなりません。そこまで行くためには、お互いが生産に不可欠の存在になること「生産共同体」という新しい関係を作っていくことです。

「無欲にして、ひたすら、これが秘訣、奥義です。「常に自分を勘定に入れず、決して怒らず、雨にも負けず」気軽に用が頼めて、計らずも手にした物で満足し、祭りごとには夢中になって人を笑わせ、戦いとなればイソイソとして出掛けて行く、ナロードニキはそのような人に成らねば務まりません。

新しい、そして最後の革命は、特定のイデオロギーに基いて、予めプログラミングされた斗争路線に、人民を組織、統一し、行動することではなく、イデオロギーやヴィジョンの相違を超えて「同志よ、アナタが必要なのだ、戦法はちがっても、我々は同じ権力と戦っている同志なのだ」という目覚めを、人民の中に浸透させて行くことから始まります。権力の巧妙な分断作戦に対する巻返しを、直接的な出会いを通してやって行くのです。

人生で最も美しいことは、「つながりを持つ」ということ。未知なる同志と、大地と、海と、宇宙と、神と、虫ケラと、人民と、私自身と、つながりを持つということです。ファミティーヴとはそれであり、宗教とは「文明による分断」に対する「意識のつながり」の復活、回復以外の何物でもありません。

## 意識のつながり

弱肉強食、適者生存の生物学的進化は、ヒトという意識的生物に至って、ストツアがかかりました。果々たる生物学的体験の蓄積である本能という、潜在意識の強力な慣性に従って、意識は自然界の摂理に変革を迫ったのです。本能と欲望の奴隷であることからの解放運動です。三葉虫や恐龍の生命史に見るごとく、一つの種があまりにも特殊器官を発達させ、単一繁栄すると、ついには滅亡してしまいます。人間中心主義の単一文化が、権力志向のネクロフェリヤに変貌して行くゆえんです。

弱者を搾取し、破滅することは強者の絶滅をも意味します。生きとし生けるものに対する思いやりと相互扶助が、基本となるような“生命共同体”を、“進化”は意識し始めたのです。人類は惑星地球に現れた最新の、そして最後の“種”であり、進化の輪を完成する鍵と同時に、破壊する力をも持っています。意識こそは、創造主の賭け金の全てです。

意識が、心が、想いが、知覚が、感覚が「あらゆるものは、一なるもの、多様な顕れであり、生きとし生けるものは、我が同胞である」という“つながりの純粋性”に達した時、世界は完成するのです。真の平和とはそれ以外になく、故にこの至高点まで戦い抜かない者に、平和はないのです。平和、平和と軽々しく言う連中を疑わねばならないゆえんです。

革命とは“特定の事象”、例えば、暴動、パニック、クーデターといった事象ではなく、社会制度の変革でもありません。それは全人類的な無知無明からの目覚め、進化の極点である純粋意識実現までの、“現在進行形”の戦いなのです。それは“愛とエゴ”、“自由と束縛”という根源的な戦いであることから、神と悪魔との対決という“神話的現在”を夢見させてくれます。この“存在を夢見る”という能力こそ、人類がその感覚から行動まであらゆる器官を犠牲にし、退化させて獲得した進化の最先端なのです。

「人間は虫ケラ同様のつまらない存在か？しかし人間だけが、神を夢見ることが出来る」と聖者は言う。では何処に神を夢見るのか？虫ケラ同様の人民の中にです。この虫ケラのような人民に対する興味深々たる好奇心のない人間は、革命人にはなれません。ヒトという奇妙な生き物の、生まれましたにうんざりしながら、その可笑しさと悲しみを噛みしめられない人間は、人民に働きかけ共感と同意を得ることが出来ないからです。

「人民意識をいかにして普遍に高め、革命急進化して行くか」それがナロードニキの役どころであり、それと同時に、世界各地で戦っている急進的革命意識とつながって、人民戦線の巨大なネットワークを編成して行くことです。ナロードニキは、地域ゲリラ軍の戦士であると同時に、それを支援する陰の戦列をも組織して行かねばなりません。

左右両権力による帝国主義に対して、世界各地で様々な戦法で、公然と又非公然と戦っている同志たちを、分断孤立化させないために、常にアンダーグラウンドの連帯と団結の輪を広げ、本物の科学者たちの警告に耳を傾け、真理を愛し、まやかしを看破し、“掛け値”なしの信愛関係を確立しなければなりません。なにしろ戦う相手は、血も涙もないコンピュータによって人民を管理し、フルトニウムによって支配を企む狂人なのですから。

## 人民に対する三態

「私と人民がいる限り、大丈夫だ」と言っていた田中正造が、晩年には「人民様とその付き人がある限り」と言い変えたことは、彼の意識のラディカルな成長と、ナロードニキの根本原理を物語っています。私たちが「近代的自我」の独房から脱出し、人民という普遍的実在に達するためには、人民様の付き人、召使いとしての徒弟奉公をせねばなりません。完全に目覚めた人、仏陀になるためには、菩薩という滅私奉公の期間が必要のように、普遍なる一に達するためには「あなたは主人、私は召使い」という、二元論的プロセスを経るのです。人民こそは磔刑にされたキリストであり、左追されて正に爆発寸前の根源エネルギーであり、ヨガで言う「眠れる毒蛇クンダリーニ」であり、文化の創造母胎であり、解放へのベクトルです。この神聖なエネルギー「人民力学」に対する信仰なくしては、革命は夢見ることすら不可能です。

反権力側の弱点は、宗教を等閑にし、放ったらかしにしているため、権力側の捏造した「日本教」に、国民の信仰が狂わせられ、宗教心を利用されつ放しにしている点です。墮落の極にある既成宗教に代わる、真正の人民宗教を復興させない限り、意識の戦いに勝てません。信仰は最大の力です。「今まで神を信じない者は無神論者と言われた。しかし新しい宗教は、自己を信じない者を無神論者と言う」これが宗教革命の原点です。

さて、人民様の付き人としての自我に徹することによって、自ら新しい自覚が生まれます。「自我は波、巨大な人民の海のごとく、やかな波にすぎませんが、それは無限の過去から権力の岸辺を襲い続け、怒涛となって未来へ向かう不滅のエネルギーの「現在」である」

この自覚は、マスソサエティの中での個的連帯、友達付き合い、馴れ合いでしかなかった旧来の対人関係に、少しずつ不可避的な変革を加えて行きます。人民戦線という巨大なネットワークに於ける「関係的個」として、自己を確認して行くことは、対人関係をも反権力という視座から再確認、再構成して行くしかありません。「かけがえのない同志、にお互いが成り合うのです。この時、自我は人民に対して対等です。相互浸透、相互作用により、自我が人民に止揚されて行くこの疑似一元論「あなたは全て、私はその一部分」を経て、自覚は最高の段階、不二元論に達します。

「貧しく、虐げられて来た人民こそは神であり、神とは無名性の中に遍在する「私」である。この「私」だけが至高唯一の実在であり、他の一切は時の中に現象する幻想、虚妄にすぎない。海なくして波はなく、地域なくして都市はなく、人民なくして権力は存在しない。人民こそは我が主体であり、私を超えて人民は無く、私の内に、外に、充満するのはたゞ人民である。人民こそは私の喜びであり、悲しみである。力であり、苦痛である。自由であり、束縛である。悟りであり、迷いである。輪廻であり、輪廻に打する愛である。信仰であり、自覚である。永遠の実在であり、知恵であり、祝福である。そうだ！ 私は人民だ！ 私は人民だ！ 人民に勝利を！ 主よ！！

新正暦40079年正月

無我刹道場